

新潟 白球の キセキ

高校野球100年

2



母校のグラウンドで打席に
たつ橋本隆造(右) 119
47年、三上賢作さん提供

長岡OBの三上賢作(82)は、古びた1枚の写真を持っている。「伝説の名投手だと聞いています」。写っているのは、戦前の社会人野球を代表する投手で「鉄腕」と称された橋本隆造(1894〜66年)。1947年、母校のグラウンドでとられたものだ。旧制長岡中が初めて全国

「考える野球」残した鉄腕



橋本隆造＝「スコアボードが見ていた。函館大洋倶楽部80年の歩み」より

大会の出場権を獲得した18年。橋本を擁する早稲田大は、フィリピンで地元の大リーグと交流戦をした。5日連続の強行日程の中、5試合を1人で投げ抜き、4勝1敗。疲れ知らずの好投は、地元紙から「鉄腕」とたたえられたという。

◎◎◎

橋本は長岡生まれで、長岡中で野球部に入った。豪速球と大きく落ちるドロップに、練習を見に来た早大の投手がはれ込み、15年に早大野球部へ進み、フィリピン遠征で名をあげた。18年に早大を中退。社会

人野球チームの名門、北海道の函館大洋(オーシャン)倶楽部に入った。22年、後に沢村栄治を率いてベーブ・ルースら全米オールスターチームと戦い、野球殿堂入りも果たした久慈次郎が入部。プロ野球がなかった当時、この名捕手とのバッテリーで、日本最強のチームとうたわれた大阪毎日との招待試合に勝つなど、オーシャンの黄金時代を築いた。

◎◎◎

オーシャンは今も活動し、現存する最も古い社会人野球チームの一つとなっている。部長の津国和男(62)は「当時の野球界の記録はほとんど残っていない。今も知られているというところは、相当な名選手だったのだでしょう」と話す。30年ごろ一線を退き、監督だった久慈が試合中の事故で39年に急死したのを受け、監督に就任した。やがて軍に招集される選手が相次ぎ、社会人野球の大会も中止に。42年、橋本は監督をやめた。2年後に帰郷し、終戦を迎える。糖尿病を患い、以後表舞台に立つことはほとんどなく、後輩らを個人的に指導した。49年に長岡の主将として

旧制長岡中出身、戦前の名投手

県大会で準優勝した多田隆三(83)は、助言をもらった一人。合理性を欠いた根性論の練習が主流の時代、「頭を使え」という教え方が印象に残っている。

「例えば、どちらも右利きがセンターとレフトを守る場合、左中間のフライはレフトが捕球すると、本塁へ投げる場合は体を回転しなければいけない。すぐに投げられるセンターがとるべきだ」などと教えられたという。

「物事の順序を考えろと常にいつてましたね」と多田は懐かしむ。

息子の孝典(71)は、指導にいくと言って外出する父の姿を覚えている。「戦前の活躍も伝え聞くくらい。父は家で野球の話はあまりしなかった。でも指導には熱心だったようです」

今夏、長岡が掲げるのは「考える野球」。海を越え、世界も相手にした鉄腕の教えは、時代を超えて受け継がれている。

敬称略

(次回は、県勢32年ぶりの甲子園出場を振り返ります)